

## 極小規模校における体育授業に関する一考察

—複式学級によるゴール型授業を通して—

A Study on Physical Education in a Small-scale School: Through the Practical  
Implementation of goal-type Games in Combined Classes

黒原貴仁\*・平谷まり\*\*  
Takahito Kurohara, Mari Hiratani

\*鹿児島女子短期大学      \*\*瀬戸内町立諸鈍小学校

本研究は、鹿児島県の極小規模校において、「単元構造図」による授業検討を授業者2名及び研究者が行い、対象校における体育授業を実践した。なお、第3・4学年及び第5・6学年の合計7人の体育科授業ゲーム及びボール運動領域を対象とした。今回得られた知見として、単元構造図を作成し、授業を行ったことで、授業者からは指導のポイント及び評価基準及び評価のタイミングを明確にすることができる等、授業のしやすさを感じることができたようだ。しかし、「形成的授業評価法」の結果は、「成果」、「意欲関心」、「学び方」、「協力」の4項目すべてで、第3・4学年児童は高い評価であることから、十分満足感が得られる内容であったことが推測されるのに対し、第5学年児童は、「成果」、「意欲関心」、「学び方」、「協力」のすべての項目で第3・4学年児童よりもかなり低い評価となり、十分な満足感が得られたとは言い難い結果となった。

**Key words**：極小規模校、複式学級、ゴール型、単元構造図

### I. はじめに

#### 1. 鹿児島県におけるへき地教育・複式教育の動向

南北600キロに広がる鹿児島県では、少子化に伴い、児童生徒数の減少が顕著にみられ、学校の小規模化、統廃合が増加傾向にある。平成28年度3月に鹿児島県教育委員会が発した「南北600キロの教育～へき地・複式学級の手引き～」によると、小学校における複式学級を有する学校の状況は、243校で学級数は518で学級であり（平成27年5月1日現在）、全小学校数の約半数が複式学級を有していることになる。そもそも複式学級とは、2つ以上の学年で構成される学級のことを指し、「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の標準に関する法律（第3条）」によれば、小学校の場合、2つの学年の児童数の合計が16人以下（第1学年を含む場合は8人以下）の場合、複式学級が編成されることになる。

本県におけるへき地に属する学校（公立）の割合は非常に高く、へき地等学校数の割合は40.3%、へき地等学校児童数の割合は12.9%であり、いずれも全国で1位である。また、県全体の学級数に占める複式学級の割合は11.0%であり、全国2位の高知県6.8%を大きく上回る割合となって

いる（鹿児島県教育委員会2018）。その要因として、離島の学校が多いこと等、地理的要因から、へき地等指定学校が多く、さらに小規模校が多いことが複式学級の占める割合を高めていると考えられる。

少子化に伴い、今後ますます複式学級を有する小規模校が増加することが明らかことから、県全体でへき地・小規模校教育に関する研修会等を実施し、複式学級における授業の進め方等の研究が進められている現状にある。

#### 2. へき地・複式教育での諸問題

へき地にある小学校での授業実施、特に体育科授業を行う上では、次のような課題がある。第1に、狭い人間関係や固定化に伴い社会性が育たないことである。集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動（小学校学習指導要領解説体育編 2008）を学習内容とするボール運動系の授業では、学年差や発達段階に伴う体力・体格の違いや運動スキルに大きな差があり、各年齢における体系的、系統的な学習内容を学ぶことに困難が生じると考える。また、コート内で攻守が入り交じるゴール型ゲームでは、学年差や発達段階に伴う体力・体格の違いから、プレイ中に不用意な接触が発生したり、大事

故につながる危険性の増加が懸念される。次に、大きな集団での学習・話し合い活動が困難なことから思考力・表現力が育たないことである。過去筆者が参与観察した過小規模では、“ギャングエイジ”と呼ばれる時期の子どもの姿がみられ、他世代を寄せ付けなく、認めた相手のみと友だち関係を結ぼうとする序列意識が散見された。加えて、高学年の子どもたちは、休憩時間内のサッカー遊びが成立しないという理由だけで、中学年、低学年の子どもを仲間に入れ、ゲームが面白くないと思うや否や、ボールを低学年の子どもにぶつける行為や不要なスライディングタックルで友だちを転倒させることに楽しみを見出す姿が観察された。このような事例は、体育授業中에서도見受けられ、高学年のゴール型(サッカー)では、6年生が5年生に対して否定的な言動をとる場面が多々観察された。3つ目の課題として、教え合う場の設定や学び合いが難しく主体性や向上心が育ちにくいことである。競争意識の少ない環境で育ったがゆえに向上心にやや乏しく、自ら進んで取り組む力が弱いとされている。また、打たれ弱く、失敗を引きずり、運動有能感や自己肯定感が低く、自信を持って発表したり、行動したりすることができない。さらに、思考力を求められることが苦手であり、学習に対して受け身な子どもが多いとされている(盛島 2015)。

こうした課題は、小規模校・複式学級における体育科授業の一部に過ぎないと考える。また、今後の教育においては、一方向・一斉型の授業だけではなく、子どもたちが自ら課題を発見し、主体的に学び合う活動など、協働的な学習を通じて、意欲や知的好奇心を十分に引き出すことが求められ、第二期教育振興基本計画(文部科学省 2013)においても、「言語活動の充実や、グループ学習、ICTの積極的な活用をはじめとする指導方法・指導体制の工夫改善を通じた協働型・双方型の授業革新」の必要性が示されている。しかしながら、子どもが極端に少ない場合、班活動及びグループ活動などの協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じることから、新たな時代に求められる教育活動を充実させることが困難が生じるという大きな課題も考えられる。

## II. 研究の目的と方法

これまで述べてきた小規模校・複式学級における体育授業の状況を踏まえ、鹿児島県の極小規模校において、国立教育政策研究所の教育課程研究指定授業等を通して推奨する、指導と評価の一体化をより可視化できる「単元構造図」による授業検討を授業者2名(X教諭1年目、Y教諭8年目)及び研究者(大学教員8年目・専門:体育科教育学)が行い、

対象校における体育授業を実践し、省察を図ることを目的とした。

本研究の対象は、鹿児島県の南部に属しており、大島海峡を挟んで奄美大島南岸と向かい合っている離島である。人口は約1,000人であり、交通手段は奄美大島からフェリーもしくは海上タクシーを使用する。その離島にある極小規模校・小中併設校 A 小学校である。全校生徒12人の小学校であり、今回の授業実践では、第3,4学年及び第5,6学年(第3学年男児3人、第4学年男児1人女児1人、第5学年男児1人女児1人、なお第6学年児童は在学していない)の合計7人の体育科授業ゲーム及びボール運動領域を対象とした。なお、平成30年1月から2月の間に行われた全8時間の体育授業である。

## III. 結果と考察

### 1. 授業計画

全8回の体育科授業実施に際し、「単元構造図」を用いて計画を行った。

単元構造図は、学習指導要領を拠り所とする指導内容の確認、学習過程の具体化、評価基準の設定を一連の流れとして捉える俯瞰図である(佐藤・友添, 2011. 佐藤, 2014)。学習指導要領に示された内容に基づき、①年間指導計画、②単元計画・学習の流れ等、③教材・教具の開発、④効果的・効率的な学習評価の各段階があるとされ、学習内容と①~④をつなぐルールが単元構造図である(佐藤、2015)。単元計画は研究者が土台を作成し、それをもとに授業実施者と研究者の両者で検討会を開き、修正・加筆を繰り返すことで単元構造図を介した授業の設計を行った。

### 2. 対象授業における単元構造図の検討

単元構造図の作成にあたり、学習指導要領に明示されている内容の検討を行った。今回の実践では、第3・4学年及び第5・6学年を対象としているため、授業計画には多くの検討会を開いた。検討会は、メール及びテレビ電話を駆使し行った。なお、今回の実践では、平成29年3月に告示された小学校学習指導要領(以下、学習指導要領)及び平成29年7月に告示された小学校学習指導要領解説 体育編(以下、学習指導要領解説)をもとに設計を試みた。

「指導内容の概要」は次の通りである(図1)。今回の実践では、極小規模校の第3,4学年及び第5学年の児童が一斉に授業を行うため、指導内容の概要も3,4学年及び5,6学年の両方の内容を含めた授業内容の概要が求められた。

「学習指導要領の内容」は次の通りである(図2)。資質・能力の要素において、教育基本法が目指す教育の目的を踏

## 極小規模校における体育授業に関する一考察

第3学年及び第4学年では、(1)各種の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方及び健康で安全な生活や体の発育・発達について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。(2)自己の運動や身近な生活における健康の課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。(3)各種の運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とも仲よく運動をしたり、友達のを認めたり、場や用具の安全に留意したりし、最後まで努力して運動をする態度を養う。

第5学年及び第6学年では、(1)各種の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方及び心の健康やけがの防止、病気の予防について理解するとともに、各種の運動の特性に応じた基本的な技能及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする。(2)自己やグループの運動の課題や身近な健康に関する課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、自己や仲間考えたことを他者に伝える力を養う。(3)各種の運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に留意したりし、自己の最善を尽くして運動をする態度を養う。

図1 指導内容の概要

1知識及び技能	第3,4学年では、(1)次の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、易しいゲームをすること。 ア ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすること。 第5,6学年では、(1)次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。 ア ゴール型では、ボール操作とボールを持たないときの動きによって、簡易化されたゲームをすること。
2思考力、判断力、表現力等	第3,4学年では、(2)規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を選んだりするとともに、考えたことを友達に伝えること。 第5,6学年では、(2)ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。
3学びに向かう力、人間力等	第3,4学年では、運動に進んで取り組み、規則を守り誰とも仲よく運動をしたり、勝敗をうけいれたり、友達のを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりすること。 第5,6学年では、(3)運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受けいれたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすること。

図2 学習指導要領の内容（3,4学年及び5,6学年）

まえつつ、社会の質的变化等を踏まえた現代的な課題に即して、これからの時代に求められる人間の在り方を考慮し、学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき三大要素である、「1. 知識及び技能」、「2. 思考力、判断力、表現力等」、「3. 学びに向かう力、人間力等」に照らし合わせながら内容を構築した。「学習指導要領解説の記載内容」は次の通りである(図3)。上記と同じく三大要素を中核に考え、学習指導要領解

1知識及び技能	第3,4学年のゴール型ゲームでは、その行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、コート内で攻守入り交じって、ボールを手や足でシュートしたり、空いている場所に素早く動いたりする易しいゲーム及び障地を取り合って得点ゾーンに走り込むなどの易しいゲームをすること。 【例示】○易しいゲーム(味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲーム) ○易しいゲーム(障地を取り合うゲーム):ボールを持ったときにゴールに体を向けること。味方にボールを手渡したり、パスを出したり、シュートをしたり、ゴールにボールを持ち込んだりすること。ボール保持者と自分の間に守る者がいない空間に移動すること。 ◎運動が苦手な児童への配慮の例 パスを出したり、シュートをしたりすることが苦手な児童には、ボールを保持する条件を易しくするとともに、ボールを保持した際に周囲の状況が確認できるように言葉がけを工夫するなどの配慮をする。ボール保持者と自分の間に守る者がいない空間に移動することが苦手な児童には、守る者の位置を見るように言葉がけを工夫するなどの配慮をする。 第5,6学年のゴール型では、その行い方を理解するとともに、投げる、受ける、蹴る、止める、運ぶ、手返すといったボール操作とボール保持者からボールを受けることのできる場所に動くなどのボールを持たないときの動きによって、攻撃側にとって易しい状況の中でチームの作戦に基づいた位置取りをするなどの攻守入り交じった簡易化されたゲームや障地を取り合う簡易化されたゲームをすること。 【例示】○簡易化されたゲーム(攻守が入り交じって行うゴール型) ○簡易化されたゲーム(障地を取り合うゴール型):近くにいるフリーの味方にパスを出すこと。相手に捕られない位置でドリブルをすること。ボール保持者と自己の間に守備者が入らないように移動すること。得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをすること。ボール保持者とゴールの間に体を入れて守備をすること。 ◎運動が苦手な児童への配慮の例 得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをすることが苦手な児童には、シュートが入りやすい場所に目印を付けたり、ボールを保持した際に最初にゴールを見ることを助言したりするなどの配慮をする。ボール保持者のゴールの間に体を入れて守備をすることが苦手な児童には、仲間がゴールの位置を教えるようにするなどの配慮をする。
2思考力、判断力、表現力等	第3,4学年; ア 規則を工夫すること ○誰もが楽しくゲームに参加できるように、プレイヤーの人数、コートの広さ、プレイ上の緩和や制限、得点の仕方などの規則を選ぶ例 ・攻めと守りの局面でプレイヤーの人数に違いを設け、攻めを行いやすいようにするなどの規則を選ぶこと。 イ ゲームの型に応じた簡単な作戦を選ぶこと ○ゴール型の障地を取り合うゲームで、障地に侵入するための簡単な作戦を選ぶ例 ・少人数のゲームで、ボールを持っている人とボールを持っていない人の役割を踏まえた作戦を選ぶこと。 第5,6学年; ア ルールを工夫すること ○誰もが楽しくゲームに参加できるように、プレイヤーの人数、コートの広さ、プレイの制限、得点の仕方などのルールを選ぶ例 ・攻守に応じて動くことができる範囲を設けてプレイの制限をするなどのルールを選ぶこと。 イ 自己やチームの特徴に応じた作戦を選ぶこと ○自己やチームの特徴を確認して作戦を選ぶ例 ・チームの特徴に応じた作戦を選び、自己の役割を確認すること。
3学びに向かう力、人間力等	第3,4学年では、ア 易しいゴール型ゲームに進んで取り組むこと。イ ゲームの規則を守り、誰とも仲よくすること。ウ ゲームで使用する用具などの準備や片付け、友達と一緒にすること。エ ゲームの勝敗を受け入れること。オ ゲームやそれらの練習の中で互いに動きを見合ったり、話し合ったりして見つけた動きのよさや課題を伝え合う際に、友達のを認めること。カ ゲームやそれらの練習の際に、使用する用具などを片付けて場の危険物を取り除くなど、周囲を見て場や用具の安全を確かめること。 ◎運動に意欲的でない児童への配慮の例 ボールが固くて恐怖心を抱いたり、小さくて操作しにくかったりするために、ゲームに意欲的に取り組めない児童には、柔らかいボールを用意したり、大きなボールやゆっくりとした速さになる軽めボールを用意したりするなどの配慮をする。学習の仕方が分からないために、ゲームに意欲的に取り組めない児童には、学習への取組の手順を掲示物で確認できるようにするなどの配慮をする。場や規則が難しいと感じ、ゲームに意欲的に取り組めない児童には、文字やイラスト等を用いて提示しながら説明したり、より易しい規則に変更したりするなどの配慮をする。新しく提示した動きが分からないために、ゲームや練習に意欲的に取り組めない児童には、よい動きの友達やチームを観察したり、掲示物などの具体物を用いて説明したりするなどの配慮をする。審判の判定に納得しなかったり、ゲームに勝てなかったりすることで、ゲームに意欲的に取り組めない児童には、判定に従うことやフェアなプレイの大切さについて、継続して伝えていくようにするなどの配慮をする。ゲームに参加している実感がなく、楽しさを味わえない児童には、チームの人数を少なくして、役割を明確にしたり触球回数を増やせるようにしたりするなどの配慮をする。友達と仲よくゲームに取り組めない児童には、試合の前後に相手や味方同士で挨拶や握手を交わしたり、相手や味方同士でよいプレイや取組を称賛したりするなどの配慮をする。 第5,6学年では、ア ゴール型の簡易化されたゲームや練習に積極的に取り組むこと。イ ルールやマナーを守り、仲間と助け合うこと。ウ ゲームを行う場の設定や用具の片付けなどで、分担された役割を果たすこと。エ ゲームの勝敗を受け入れること。オ ゲームや練習の中で互いの動きを見合ったり、話し合ったりする際に、仲間の考えや取組を認めること。カ ゲームや練習の際に、使用する用具などを片付けたり場の整備をしたりするとともに、用具の安全に気を配ること。 ◎運動に意欲的でない児童への配慮の例 味方や相手が投げけるボールに恐怖心を抱くためにゲームに意欲的に取り組めない児童には、柔らかいボールを用意したり、大きなボールやゆっくりとした速さになるボールを用意したりするなどの配慮をする。チームの中で何をすればよいか分からないためにゲームに意欲的に取り組めない児童には、チーム内で分担する役割を確認するなどの配慮をする。場やルールが難しいためにゲームに意欲的に取り組めない児童には、場の設定やルールをチームで一つずつ確認するなどの配慮をする。新しく提示した動きが分からないためにゲームに意欲的に取り組めない児童には、代表の児童やチームが行う見本を観察したり、ゲーム中のポジションを確認したり、その動きを動画で確認したりする場を設定するなどの配慮をする。技能が高いにもかかわらずゲームに意欲的に取り組めない児童には、リーダーとしてチームをまとめるようにしたり、仲間と動きのアドバイスをする役割を担うようにしたりするなどの配慮をする。ゲームに負け続けるためにゲームや練習に意欲的に取り組めない児童には、チームに合った作戦を選び直したり、新たな作戦を試したりすることを促すなどの配慮をする。チーム内で仲間とよく関わることでできないためにゲームに意欲的に取り組めない児童には、チーム内の役割を明確にしたり、その役割に取り組むように助言したりするなどの配慮をする。仲間と仲よく助け合ってゲームに取り組めない児童には、役割を果たしたことを、最後まで全力でプレイしたことを、味方を励ます言葉がけがあったことなどの取組を、授業のあとめで取り上げて称賛したり、児童が互いに称え合ったりする場面を設定するなどの配慮をする。

図3 学習指導要領解説の記載内容（3,4学年及び5,6学年）

説に記載されている内容について検討を図った。

「学習過程及び評価のタイミング」は次の通りである(図4)。

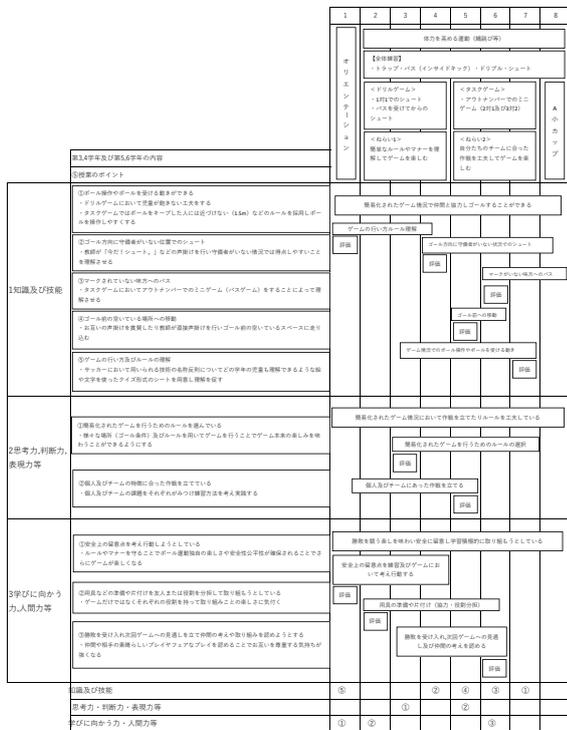


図4 学習過程及び評価のタイミング

今回は対象児童の実態を考慮し、8時間を1単元と捉え、「体力を高める運動」、「全体練習」、「ドリルゲーム」、「タスクゲーム」、「ねらい1：簡易なルールやマナーを理解してゲームを楽しむ」、「ねらい2：自分たちのチームに合った作戦を工夫してゲームを楽しむ」ということを中心に学習過程を構築した。なお、資質・能力の要素である「知識及び技能」については、「①ボール操作やボールを受ける動きができる」、「②ゴール方向に守備者がいない位置でのシュート」、「③マークされていない味方へのパス」、「④ゴール前の空いている場所への移動」、「⑤ゲームの行い方及びルールの理解」。「思考力・判断力・表現力等」については、「①簡易化されたゲームを行うためのルールを選んでいる」、「②個人及びチームの特徴に合った作戦を立てている」。「学びに向かう力・人間力等」については、「①安全上の留意点を考え行動しようとしている」、「②用具などの準備や片付けを友人または役割を分担して取り組もうとしている」、「③勝敗を受け入れ次回ゲームへの見通しを立て仲間や取り組みを認めようとする」をそれぞれ授業のポイントとし、指導及び評価の一体化を目指した。

「評価基準」は次の通りである(図5)。

1知識及び技能	知識及び技能(～ができる) ①簡易化されたゲームで、攻守が入り交じった攻防をするためのボール操作やボールを受けるための動きができる。 ②ゴール方向に守備者がいない位置でシュートができる。 ③マークされていない味方にパスを出すことができる。 ④パスを受けるためにゴール前の空いている場所に移動することができる。 ⑤簡易化されたゲームの行い方及びルールを理解できる。
2思考力, 判断力, 表現力等	思考力・判断力・表現力等(～している) ①ゲームの行い方を知るとともに、簡易化されたゲームを行うためのルールを選んでいる。 ②個人及びチームの特徴に応じた攻め方を知るとともに、自分のチームの特徴に合った作戦を立てている。
3学びに向かう力, 人間力等	学びに向かう力・人間力等(～しようとしている) ①学習した安全上の留意点を練習及びゲームにおいて考え行動しようとしている。 ②ゲームで使用する用具などの準備や片付けを友人、または役割を分担して取り組もうとしている。 ③ゲームの勝敗を受け入れ、次回のゲームへの見通しを立て、仲間の考えや取り組みを認めようとしている。

図5 評価基準

授業におけるポイントをもとに、「知識及び技能(～ができる)」では、①簡易化されたゲームで、攻守が入り交じった攻防をするためのボール操作やボールを受けるための動きができる、②ゴール方向に守備者がいない位置でシュートができる、③マークされていない味方にパスを出すことができる、④パスを受けるためにゴール前の空いている場所に移動することができる、⑤簡易化されたゲームの行い方及びルールを理解できるの、5項目を評価基準とし、「思考力・判断力・表現力等(～している)」では、①ゲームの行い方を知るとともに、簡易化されたゲームを行うためのルールを選んでいる、②個人及びチームの特徴に応じた攻め方を知るとともに、自分のチームの特徴に合った作戦を立てていることの2項目、「学びに向かう力・人間力等(～しようとしている)」では、①学習した安全上の留意点を練習及びゲームにおいて考え行動しようとしている、②ゲームで使用する用具などの準備や片付けを友人、または役割を分担して取り組もうとしている、③ゲームの勝敗を受け入れ、次回のゲームへの見通しを立て、仲間の考えや取り組みを認めようとしている、の3項目をそれぞれ評価基準として設定した。

図6は、検討会を得て作成した単元構造図である。授業実践では、この単元構造図をもとに授業を実施した。

### 3. 授業の成果

図7は、長谷川ら(1995)が明らかにした「形成的授業評価法」をもとにした、毎時間終了後の児童アンケートの集計結果(推移グラフ及び診断基準に照らした5段階評価)である。5段階評価からは「成果」、「学び方」、「協力」についての項目では、「4」、「5」の評価が散見されることから、児童にとって「中程度、もしくは中程度やや上」の単元であったことが推測される。

# 極小規模校における体育授業に関する一考察

学年	第3学年及び第5学年 運動領域 ゲーム及びボールゲーム (サッカー)	第3学年及び第5学年の内容	評価基準
知識及び技能	<p>【知識及び技能】                      ① 各種の運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>	<p>【知識及び技能】                      ① ボール運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>	<p>【知識及び技能】                      ① ボール運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>
思考力・判断力・表現力等	<p>【思考力・判断力・表現力等】                      ① 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>	<p>【思考力・判断力・表現力等】                      ① ボール運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>	<p>【思考力・判断力・表現力等】                      ① ボール運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>
学びに向かう力・人間性等	<p>【学びに向かう力・人間性等】                      ① 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ 運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>	<p>【学びに向かう力・人間性等】                      ① ボール運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>	<p>【学びに向かう力・人間性等】                      ① ボール運動の楽しさや喜びが味わえるように指導すること。その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ② ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。                      ③ ボールゲームのルールや特徴を理解し、その行為が健康や体力の増進に役立つこと、また、仲間やチームの絆を深め、自己の成長につながることを理解させること。</p>

図6 単元構造図

図8は、「単元過程における各学年の4観点別形成的授業評価の推移及び診断基準に照らした5段階評価」である。「成果」、「意欲関心」、「学び方」、「協力」の4項目すべてで、第3・4学年児童は「4」、「5」という高い評価であることから、十分満足感が得られる内容であったことが推測される。しかし、第5学年児童は、「成果」、「意欲関心」、「学び方」、「協力」のすべての項目で第3・4学年児童よりもかなり低い評価となった。その要因として、検討会では、授業者2名より「どうしても第3学年及び4学年児童に目がいき、スキルの難易度や方法、ルールを中学年児童に応じた工夫を行ったこと、準備や片付けにおいて第5学年児童に頼りきりになったこと、教え合う考える活動というより第5学年児童の意見を第3・4学年が聞き入れ、その作戦や動きをゲーム中に実行しても成果が得られずに不満な表情があったこと」等が挙げられた。今回の実践では、第3・4学年及び第5学年という発達段階の異なる3学年の児童が同単元内容を行ったことから、スキルの差、体格の差、経験の差が顕著に現れる結果となった。

## IV. まとめと課題

本研究は、鹿児島県の極小規模校において、国立教育政策研究所の教育課程研究指定授業等を通して推奨する、指導と評価の一体化をより可視化できる「単元構造図」による授業検討を授業者2名（X教諭1年目、Y教諭8年目）及び研究者（大学教員8年目・専門：体育科教育学）が行い、対象校における体育授業を実践し、省察を図ることを目的とした。なお、第3・4学年及び第5・6学年（第3学年男児3人、第4学年男児1人女児1人、第5学年男児1人女児1人、なお第6学年児童は在学していない）の合計7人の体育科授業ゲーム及びボール運動領域を対象とした。

今回得られた知見として、単元構造図を作成し、授業を行ったことで、授業者からは指導のポイント及び評価基準及び評価のタイミングを明確にすることができ、児童の動き及び内容を焦点化することが可能なことから、授業のしやすさを実感することができたようだ。また、検討会（メール及びテレビ電話等）を複数回実施することで、指導内容の体系化や系統性を授業実施者及び研究者で共有することができ、今後の授業実施の指標となることなど肯定的な意

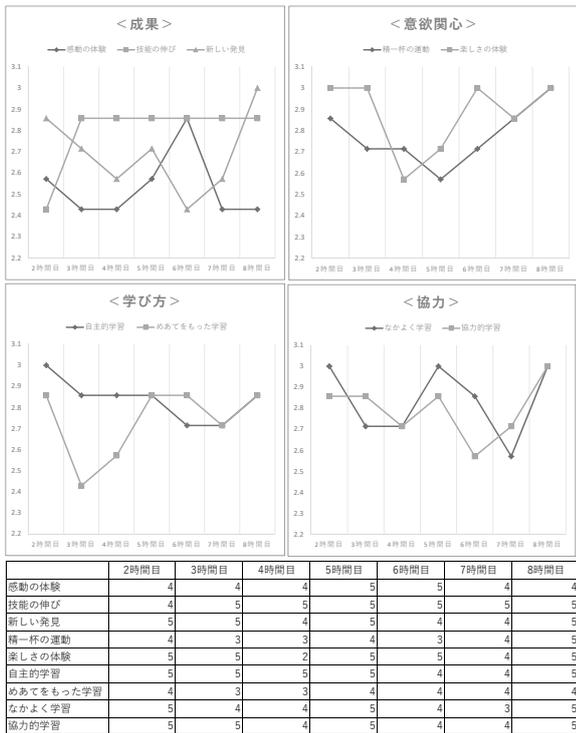


図7 単元過程における形成的授業評価の推移及び診断基準に照らした5段階評価

見が多数挙げられた。しかし、児童らがとらえる体育授業の水準（良し悪し）を評価することができる「形成的授業評価法」の結果は、「成果」、「意欲関心」、「学び方」、「協力」の4項目すべてで、第3・4学年児童は高い評価であることから、十分満足感が得られる内容であったことが推測されるのに対し、第5学年児童は、「成果」、「意欲関心」、「学び方」、「協力」のすべての項目で第3・4学年児童よりかなり低い評価となり、十分な満足感が得られたとは言い難い結果となった。

今後の課題として、複式学級（発達段階の異なる3学年）での授業実施は、上述した結果を踏まえると非常に困難を極めた。その要因として、単元構造図の作成段階において学習指導要領解説が2年間のまとまりで内容を提示されており児童の実態に応じた内容を整理することが難しいこと、学習内容を的確に設定しその内容に合致した運動教材やドリルゲーム・タスクゲーム及びルールの設定を行うこと等の難しさが生じた。今後上述した課題をもとに、異なる学年が複数存在する授業においても、児童らが充実感や学習内容の学びが保証されるような単元構造図の作成や授業づくり及び授業実施における工夫や方策の検討が不可欠な作業であるということが明確になった。

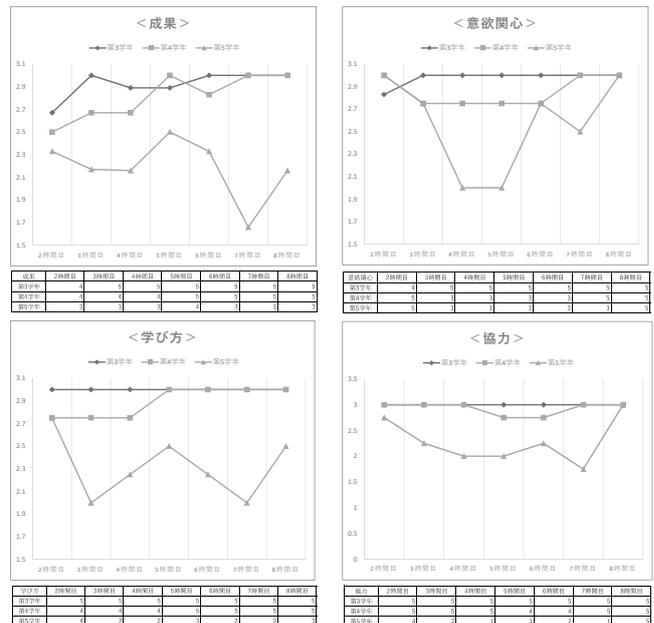


図8 単元過程における各学年4観点別形成的授業評価の推移及び診断基準に照らした5段階評価

### 参考文献

- 1) 廣瀬勝弘 (2010) ボールゲームをめぐる実践モデルの多様性と可能性を考える. 体育科教育58(11): 10-13.
- 2) 鹿児島県教育委員会 (2018) 本県教育の特色を表す各種データ.
- 3) 黒原貴仁 (2015) 複式学級におけるゴール型ゲームの授業づくり. 体育科教育63(2): 36-39.
- 4) 国立教育政策研究所、教育課程研究センター (2002) 評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 (小学校). ([http://www.nier.go.jp/kaihatu/houkoku/index\\_e.htm](http://www.nier.go.jp/kaihatu/houkoku/index_e.htm))
- 5) 文部科学省 (2013) 教育振興基本計画. ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_ics-Files/afildfile/2013/06/14/1336379\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_ics-Files/afildfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf))
- 6) 文部科学省 a (2017) 小学校学習指導要領 (平成29年告示). 東洋館出版社.
- 7) 文部科学省 b (2017) 小学校学習指導要領解説 体育編 (平成29年告示). 東洋館出版社.
- 8) 盛島寛 (2015) 体育における小規模校の弱みを強みに変えるために. 体育科教育63(2): 14-17.
- 9) 無藤隆 (2017) カリキュラム・マネジメントで教育課程を見直し教科を超えて生きる資質・能力の育成を図る. 総合教育技術第71巻第16号: 12-14.
- 10) 佐藤豊 (2014) 単元構造図を活用して指導計画を作成する. 中学保健体育科ニュース, 1: 4-6.
- 11) 佐藤豊・友添秀則 (2011) 楽しい体育理論の授業をつくらう. 大修館書店.
- 12) 佐藤豊・椿ちか子 (2015) 単元構造図、模擬授業、映像視聴の連続体験による体育科教員養成授業モデルの検討. 一鹿屋体育大学における2013年保健体育教育法Ⅳの授業実践

とその省察から一. 鹿屋体育大学学術研究紀要第51号：11-24.

- 13) 佐藤豊・梶ちか子 (2016) 鹿屋体育大学における2014年保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察. 一体験学習モデルに基づくアクティグ・ラーニング型授業における実践的指導力育成システムの構築に向けて一. 鹿屋体育大学学術研究紀要第52号：35-67.
- 14) 佐藤豊・友添秀則・日野克博・吉野聡・清水将・本多壮太郎・高橋修一 (2017) 単元構造図を用いた授業づくり—アクション・ラーニング型研修プログラムの効果的な活用に向けて—. 平成27年度～平成31年度 科学研究費助成事業基礎研究 B (15H0364) 教員養成、現職教員の協働によるアクション・ラーニング研修プログラムの開発 中間報告書.
- 15) 鈴木直樹・鈴木理・土田了輔・廣瀬勝弘・松本大輔 (2010) だれもがプレイの楽しさを味わうことのできるボール運動・球技の授業づくり. 教育出版.
- 16) 長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子 (1995) 小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準の試み. スポーツ教育学研究14(2)：91-101.
- 17) 鈴木理 (2004) ボールゲームのカリキュラムをどう構築し、どう実施するのか. 体育科教育52(14)：18-21.
- 18) 高橋健夫 (2003) 体育授業を観察評価する授業改善のためのオーセンティック・アセスメント. 明和出版.

(平成31年1月8日 受理)